



Title	「も」の文法的特性と語用的機能に関する研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	稲吉, 真子
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第13836号
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/78691
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Mako_Inayoshi_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 稲吉 真子

学位論文題名

「も」の文法的特性と語用的機能に関する研究

・本論文の観点と方法

本論文は、日本語の助詞「も」の用法について、形態論・統語論・意味論・語用論・社会言語学などを横断するような手法で検証分析し、網羅的に論じることにより、その特性と機能の全体像を明らかにした研究である。研究の基盤には言語学的知見があり、主にネオグライス系語用論の手法を用い、日本語記述文法や社会語用論の知見を利用して、多角的に捉えている点に特色がある。

・本論文の内容

本論文は4部11章で構成されている。以下章ごとに要旨を述べる。

第Ⅰ部は第1章で研究対象と意義、また論文構成に言及した後、第2章で「も」に関する先行研究を論じる。「も」は古代日本語から使われ続けている助詞であるが、古典文法での係助詞という扱い、現代文法での「とりたて詞」「副助詞」「係助詞」などの扱いでわかるように、文法論の中での位置づけは同じではない。大槻文法・山田文法・松下文法・佐久間文法・橋本文法・時枝文法など代表的な文法論における位置づけを論じ、学校文法から記述文法、意味研究や理論言語学に至るまで「も」を扱う先行研究を幅広く確認している。また、第3章では、後章における分析に必要な概念として、線条性・関連性理論におけるコストと負担の考え方、文脈と推意の種別と定義、ポライトネス理論などについて細かに確認し、整理している。

第Ⅱ部は、文法論として扱われることの多いトピックを中心に第4章から第7章までの4つの章からなる。第4章では、形態論的観点から、副助詞として他の助詞と複合する点も含め、後接する形態を整理する。「も」が動詞や形容詞類の連用形に後接する点は「は」と同様だが、名詞句につく場合格助詞は「が」だけが削除され、「を」と「に」は削除が任意である。また「誰も」の「も」は「誰もが…」のように格助詞を後接させるなどふるまいが異なる点が指摘されている。第5章では、従来「累加」と説明されてきた意味機能を「同一範疇判断」を標示するものとして位置づけ直し、それを更に主に品詞の共通性と意味論的包摂関係に基づく意味的同一範疇判断と、世界知識など文脈を参照して推論により成立する語用的同一範疇判断に区分できることを主張している。ただ両者は完全に離散的に対立をなすものではなく、連続的な関係をなすものと見る。第6章では、数量詞につく「も」を論じる。数量詞に後接する「も」は疑問詞など不定語に後接するものと共通性を持つ点を確認し、「も」の解釈に尺度性からの分析が有効であることを主張している。「も」は、肯定では「しか…ない」と対比され、事前の想定を基準に多寡にかかわる評価を表すが、否定では「は」と対称性をなし、境界値を表す点が整理されている。また、「一度も」のように否定強調の否定極性項目(NPI)をなす慣用表現を形成する点を確認した後で、語彙的尺度がレビンソンの尺度的Q推意の延長線上の現象と捉えられると主張している。第7章では、意味的には命題全体につくと考えられる「も」が左方に移動して、文を形成する要素たる名詞句に後接する現象を「繰り上げ現象」と捉えて分析している。繰り上げは英語における否定辞繰り上げ(Neg-raising)と形式的には似ているが、左方主要部タイプの英語と右方主要部タイプの日本語では繰り上げの意味が異なるところもある。「も」の繰り上げは、標示を早めて同一範疇判断に関する解釈に要する時間を聞き手において増大させるほか、述部に繰り込むよりも名詞句に後接させる方が形態論的操作を単純化できるなど、選択への一定の動機が見られるものの、形式上の支配

域のずれと解釈コストなど相反する点もある。総じて文脈的な解釈誘導のほか、談話効果もあり、相対的に繰り上げるメリットのほうが大きいと考えられ、日本語において選好されると見ている。

第Ⅲ部は、語用論的な分析を行うべきトピックを第8章から第10章までの3章で論じている。第8章では、句の形成に関与するケースとして複合的な接続助詞に用いる「ても」を多角的に分析している。順接的な仮定節「～すれば」は一部にテンス表示が可能なものがあるが、逆接的な仮定節とされる「～ても」ではテンス分化（時制の標示分け）がないことから節ではなく句と見なすのが妥当である。このことは、主節の時制がテモ句の時制解釈を支配する点からも確認できる。「ても」の担う前件は肯定でも否定でも後件事態（帰結部）は変わらずに成立するので、前件が後件の成立を左右しないという意味の同一範疇判断が前件に適用でき、ここから無駄な行為という推意が得られると主張する。また、第8章後半では「～しても～しても」のように反復する形式について先行研究の言う反復性だけではなく、極限までの増大性を想定した上で主節の否定部と呼応して強調する用法があることを指摘している。

第9章では、「も」の多焦点制約を並列助詞類と比較しながら論じ、照応の観点からも分析している。単文の名詞句のあとに複数の「は」を置くことはその分説性から許容されることが多いが、複数の「も」を配置すると不自然になる。これは、「も」が同一範疇判断あるいは合説性の焦点として機能しており、複数の「も」が存在する多焦点文は個々の「も」が何と同一範疇性を形成するのかについて解釈上の負荷が増大して不自然になると考えられる。一方、「は」は分説性から照応先を明示しない限定の解釈でも成立するため多焦点文の解釈コストが増大しないと考えられる。また、「も」は同一範疇判断を標示することから、「も」の付く要素と同一範疇性をなす要素が必要であるが、それが先行する形式文脈にあれば前方照応となる。「AもBも」のような相互照応は、複数個でも相互に照応性を認められるが、「は」ではこの相互照応が許されない。形式文脈の中に照応する要素が存在しない無照応は、形式的な照応性はないものの、照応による同一性や同一視といった解釈が推意として得られるとしている。これによって先行研究で不定他者に分類されてきた用法の意味やニュアンスの発生に一貫した説明が与えられる。無照応でも、疑似的に照応の効果が得られる背景には、通常のコミュニケーションには相手の発話に合理的な解釈が成立すると見なす前提的な信頼があるからだとする先行研究を引き、論証を補強している。

第10章では、先行研究に基づき、形式文脈・状況文脈・知識文脈と「も」の関与、また、その関係の中で「も」が果たす機能を論じている。「も」は「それもそうだ」あるいは「～とも言える」のように同一範疇判断の照応が不明なまま、疑似的な照応のように用いられるものがある。本論では、この種の「も」の使用をポライトネス理論の観点から説明している。前者のような用法は一種の共感形成の機能を持ち、これは話者と聴者を近接化するポジティブポライトネスの戦略と見ることができ、後者のような表現は一種のヘッジとして断言を緩和する機能を持ち、話者の判断の自由度を確保する意味でネガティブポライトネスの戦略と見ることができると主張している。

第Ⅳ部は本論文の要旨をまとめ、今後の課題について言及した第11章からなり、全体の論考が閉じられる。

以上